お伽話なんて飽きたのよっ！

妹明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お伽話なんて飽きたのよっ！

【Ｎコード】
Ｎ２９１６Ｙ

【作者名】
妹明

【あらすじ】
将来の夢：御伽の国に行くこと。
お伽話を愛してやまない松下ゆりあ（１８）。
そんな彼女がある日やってきたのは、自分の『脳内お伽話の国』！
夢が叶ったと喜んでいたゆりあだったが――――――！？

プロローグ

アリス、シンデレラ、白雪姫、ジャックと豆の木、人魚姫、赤ずきん…。
小さい頃から、お伽話が大好きだった。現実ではありえないことが起こる所がたまらなく好きだった。
わたしの周りにもこんな事が起きればと、願わなかった日はなかった位に熱中していた。
その願望は、１４年経った今でも揺らぐことなく、そこに存在している――――。

「――さん。下さん！　松下さん！！　聞いているんですか！？　松下さん！！！」
「ふぁっ！！？」
何が起きたのか分からず立ち上がると、ちゃんと席に座っているクラスメイト全員がわたしの方向を一斉に見て、爆笑した。

立ち上がったまま呆けているわたしの横に立っている担任が、ため息一つついて、肩に手を置いた。
「松下さん、今日の放課後、職員室に来なさい。分かりましたね？」
「え？　何故？」
「何故もなにも！！　貴方、進路がまだ決まっていないでしょう！？」
「進路……？　え？　出したじゃないですか！？　ちゃんと！！期限内に！！！」
「出したって、貴方、まさかアレを本気だというつもりですか？？」
驚愕した様子でこちらを見ている担任。何故そんなに驚いているのか、わたしには未だに理解できなかった。

「本気ですよ？　当然じゃないですか。正式な書類に出鱈目書くほど、わたしバカじゃありません」
「……もういいです。詳しくは放課後に聞きます。とにかく！　職員室に来なさい！！　いいですね？」
「……はい」
がくりと肩を落として担任は項垂れる様にそう言うと、教卓へと戻っていった。

何故、そんなに脱力している？　疲れたのは、こっちの方だというのに……。
担任が呼び出し理由に出してきた進路の事もいまいち理解できないし。
わたしも、いい加減恥ずかしくなってきたので、席に着いた。

放課後。わたしは職員室内で、担任と面を合わせていた。
「松下さん。とりあえず、これを見なさい」
そう言って手渡してきたのは、松下ゆりあというわたしの名前と、志望：お伽の国に行く事。と書き込んである進路調査票であった。
書いたのは当然わたしであるが。

「この『お伽の国に行く』というのは、あれですか？　遊園地の職員とかという事ですか？」
「いいえ。それでは、お伽の国には行けてないじゃないですか。わたしは、本物のお伽の国に行きたいんです。というか、行きます」
「貴方はそれを本気で言っているのですか？」
冷や汗をかき、苦笑しつつ担任は聞いてくる。

「はい。当然です」
「出来ないでしょう！！？　お伽の国に行くなんていうのは！！！

不可能でしょう！！！？」
大声を上げながら、机をバンバン叩く担任。驚いた様子で、何人かの先生が、こちらを見てくる。

「先生。信じる事は大切ですよ。出来ないと思ったら、そこで何も出来なくなります」
「それとこれとは話が違うのですよ！！　松下さん！！！」
「同じですよ。信じて、努力していれば、きっと叶います。いえ、叶えてみせます！」
わたしが自信満々にそう言ったら、もう怒る事にも飽きたのか、か弱い声で言った。

「とにかく、大学に行くとか、そういう事をここには明記しなさい。貴方の実力なら、どんな大学でも受かりますから……」
そういうと担任は、わたしに進路調査票を渡し、憔悴しきった声で、もう帰りなさいと、言い、机に突っ伏してしまった。

わたしは特に話しかける事もなく、その場からそそくさと退散した。

下校中、歩きながら進路調査票を入れていると、急に、とある一冊の本が光りだした。
わたしの宝物、お伽話集の本だ。
「お！　これは、あれかな??　この本を開けると本の中に吸い込まれちゃうのかな??」
期待に胸を膨らませ、本を開けると……
「……」
何も起きなかった。

起きないだけならよかった。発光すらもなくなった。
酷いよ……。こういう非科学的な事があったら、普通直後に何か起こるでしょうに……。
肩をがっくりと落としながら、わたしは家に帰った。

その後、特に何も起きる事もなく、平和な時間を過ごしてしまった。
寝る前に、本に一言、
「何か起きろよ！　バーカ！！」
と吐き捨てて、イライラした気持ちのまま部屋の電気を消して布団に潜った。

今考えると、多分あの一言に、本が本気で憤慨したのだろうと、思える。

プロローグ（後書き）

気まぐれ更新ですので、気長に見ていってくださいー！

ウサギと少女

（なに？　この感覚……）

目を瞑ったまま、松下ゆりあは思った。

（落ちてる様な気がする……。本当に落ちてるみたい）

そこで漸く、ゆりあは目を開けた。

眼下に広がるは、のどかな風景。それとは対照的に、凄まじいスピードで落ちていくゆりあ。

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？」

叫んでいても、落ちていく時に聞こえる、風を切るような音に負けて、何も聞こえない。

ゆりあは、そのまま地面へと一直線に落ちていった。

（あれ？　わたし、死ぬのかな？　夢も叶えてないのに……。まずいな）

理由は分からなかったが、ゆりあはとても冷静に物事を判断していた。

落ちているはずなのに、ちゃんと地面に足が着いている時の様に、冷静でいられた。

（こういう時、お伽話なら、どうなるかな……？　多分、大きな動物がクッション代わりになって、助かるのかな？）

とゆりあが思った次の瞬間。

「え？」

ゆりあは、大きくて白いモフモフした物体の上に落ちた。それがクッション代わりになって、死なずに済んだ。

「た、助かった……。なんだろう？　これ……」

「おーい。しっかり掴まっててよ？」

陽気な性格の少年が発しそうなのに、どこかやる気のない声がゆりあの耳の中に入ってきた。その声はゆりあの真下にいる白い物体から発せられたものだった。ゆりあは、頭上にハテナマークを浮かべながら、適当に、その物体の毛を掴んだ。

でかい体のわりに、毛は本当に細く、軽く掴んだだけでも結構な数を掴めた感じだそうだ。

ゆりあが、物体の毛を掴んだ瞬間、その物体は一気に縮んでいき、ついには人くらいのサイズにまで縮んでしまった。

「ふぁ……！！」

ゆりあは、その白い物体の全容を見た瞬間、思わず感嘆してしまった。

白い物体———それは、ウサギだったのだ。

ウサギなのだが、二足歩行な上、どことなく違和感を感じる見た目をしている。まるで人形のような……？

「っ……てて」

「あ、あの！　大丈夫ですか！！？」

ゆりあは、それを本物のウサギだと思ったらしく、興奮気味にウサギに声をかける。

「ん。平気。そっちは平気なの？　ゆりあ」
「え？　平気です。貴方がクッション代わりになってくれましたから。それより、何で名前知ってるのですか？」
「当然だろう。僕は君に創られた存在なんだよ？」
「創った？　わたしが？」
「そうだよ。だってこの世界自体が、ゆりあ。君の脳内の世界なんだからね」
ウサギがやる気なさげに言うと、ゆりあはしばし呆然としていた。その様子を見て、理解していないと判断したか、ウサギは言葉を続ける。

「簡単に言ってしまえば、これは夢なんだ」
「夢……。え？　これ夢なんですか！！？」
愕然とした様子のゆりあ。現実にあったら怖いというのに……。
「夢だが、これは、醒めない夢だ」
「醒めない？」
「ああ。夢の中にゆりあの実体そのものが入り込んできちゃったんだ。分かる？」
「ええっと……。う、うん？」

どう見ても、分かっていない様子のゆりあを見てウサギは嫌そうな顔をしながら、説明を加える。
「たとえば、この世界で怪我をしたとするなら、それはいつもゆりあが過ごしている方でも怪我をした事になる。こっちの世界で死ねば、現実のゆりあも死ぬ事になる」
「うーん……。ん？」
「分かんないなら、いいよ。説明が面倒だから」
ため息をもらしつつ、ウサギは説明を諦めた。

「ね、ね、貴方は、人間の姿になれたりするのですか？」
「何でそんな事聞くの？」
「わたしの脳内って事はお伽話の世界みたいな場所って事ですよね？　だから、出来るかなって」
無邪気に笑うゆりあ。その様子を見て照れながら困ったような雰囲気でウサギはゆりあを見た。

「僕はね、本来人間なんだよ」
そう言うと、ウサギは背中にあるファスナーを下ろしだした。

そして、中でガサゴソと音を立てながら腕と頭を抜き終わると人形の中から、少年が出てきた。
ウサギの象徴とも言える、白い髪の毛と大きな赤い目。そして、頭からぴろんと生えたウサギ耳。
何というか、小さくて、華奢な体つきのせいもあるが、一瞬女の子と間違えてしまいそうな
その愛くるしい姿は、ウサギそのものであった。
ゆりあは、ウサギ（人型ｖｅｒ．）を見た瞬間、思いっきり抱きついて、頬ずりしだした。

「わあ！？　ちょっ、ゆりあ！！？」
「か……可愛い！　可愛いですよお！　えっと……」
「ウサギでいいよ。名前ないし。みんなそう呼ぶし」
「ウサギ！　うちに来ませんか！？　あー、もう！！　この世の物とは思えない可愛さですよ～」
「ちょっ！　ゆりあ、やめろ！！　僕は男だっ！」
「照れてるウサギも可愛いです～！」
ゆりあの締め付ける力は計り知れなく……。ウサギは逃げようと試みるも結局逃げられなかった。
「でも、わたしの脳内なら魔法が解けるような感じに人間になると

思ったんですが」

「は？　嫌だよ。そんな非科学的な変身法」

「え？」

ゆりあは、自分の腕の中にいる少年の放った一言に愕然としている。

「あのね、ゆりあ。先に警告しておいてあげるよ。この世界は君の内側なんだ。ここにいる住民一人ひとりが、君とは異なった性質を必ず持っているんだ。そして、この世界の住民は、魔法とか、お伽話とか、説話とか、君が好むその種のものは全て嫌いなんだ」

「なんで？」

「君のそういう部分の精神面は限りなく幼い。それとバランスを取るために、裏の精神面である僕らは大人に……リアリストの様な性格の奴らが多いんだ」

「え……。じゃあ、ウサギも？」

「うん。僕もあんなもの、興味でないし、現実に有り得て欲しくないね」

「……」

夢とかかれた大きな石が落ちて砂になっていくような感覚にゆりあは襲われていた。

「ウサギ……。そんな事って……」

「ゆりあ。現実を受け入れなさい。所詮、絵空事は絵空事のままでしかないって事だよ」

肩をポンポンと叩き、情けをかけるかの声でウサギはゆりあに言った。

と、その時だった。

「おいっ！　ウサギ！！　何を道草食っているんだ、貴様は。帽子屋が紅茶が冷めるから早くしろって憤慨していたぞ！！！」

ゆりあの後ろの方から、怒り狂った少し低めの女の子の声がした。

アリスと少女

「おいっ！　ウサギ！！　何を道草食っているんだ、貴様は。帽子屋が紅茶が冷めるから早くしろって憤慨していたぞ！！！」
ゆりあの後ろの方から、怒り狂った少し低めの女の子の声がした。
ゆりあが驚いて後ろに振り返ると、そこには……。

金髪ロングヘアーの、西洋にいそうな白人が、膝少し上丈で半袖の青いワンピースに、それとほぼ同じ丈の白いエプロンと、黒白のボーダー柄のニーハイソックスを履いて、頭に大きなピンクのリボンをつけた美少女が膨れっ面で仁王立ちしていた。
その少女を見た瞬間に、ウサギは罰の悪そうな顔をし、目を少女から逸らした。
その様子を見た瞬間、更に少女の怒りが爆発したらしく、早歩きで、ウサギの前まで歩くと、ウサギの胸倉を掴んで叫んだ。

「お前に言っているんだ！！　罰の悪そうな顔をするくらいなら、詫びを入れるか逃げるかしろ！！！」
「わ、悪かったよ……。アリス。頼むから、放して」
「お前は～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！」
「わわわっ！？　ちょっと！！」
思わず口を挟んでしまったことに、口を出してから後悔するゆりあ。

案の定、アリスと呼ばれた少女は蛇のような鋭い目でゆりあを睨み付け、ゆりあは泣きそうな顔で、小さく悲鳴を上げ、腰を抜かした。
数秒間、アリスはゆりあを睨み続けると、不意にウサギから手を離し、蛇のような鋭い目も止め、可憐で、愛らしい少女の顔に戻ると、少し驚いた様子でゆりあに話しかけた。

「あんた……。松下ゆりあか？」
「ふぇ？　は、はい……」
未だに若干怖いのか、その声は限りなくか細かった。
「なら、悪い事をした」
苦笑いしながら、アリスはゆりあに手を差し伸べた。ゆりあは震える手をどうにかアリスの手の上に乗せて、立ち上がらせてもらった。

「改めまして、どーも始めまして。ワタシの名前はアリス」
「アリスって事は……、不思議の国のアリス……ですか？？」
「……を元にあんたが創り出した者よ」
「ああ……そっか」
「ちなみに、ゆりあ、この世界ではワタシ……アリスは好奇心の欠片もないわ！」
無駄に自信満々といった様子で胸を突きだし、アリスはいった。
当然、ゆりあがまた絶望したのは言うまでもないが……。

「――――と。忘れるところだった。おい、ウサギ！　早くしないと、帽子屋が暴れ出すから行くぞ！　ゆりあも一緒に来い！！」
「えっ！？　わたしもなんですか？？」
「アリスの話のキャラ以外にも、あんたが来てしまったことを報告する必要があるでしょ？」
「……その言い方だと、わたしってここに来ちゃいけない人間だったのですか？」
「当然よ。表の精神面が裏の精神面に来てしまうなんて、聞いたこと無いもの」
しれっとした様子でアリスはそういうと、ゆりあとウサギの腕を掴んで、全速力で走り出した。

アリスの走るスピードはとても速く、ウサギとゆりあは、ほとんど引き摺られている形であった。

「こういうのって、普通、ウサギがやるもんじゃないですか??
『急がなきゃ、急がないと遅れちゃう！』って」
「言ったでしょ？　この世界は、ゆりあが童話を元に作り上げた世界なんだって。だけど、住人である精神は、似ても非なるものなんだって。だから、全てが物語どおりに行く事なんて１００％ないよ」
「……本当に夢がないですねえ」
ゆりあがため息をつくと、アリスは森の中へと突き進んでいった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2916y/

お伽話なんて飽きたのよっ！

2011年11月17日21時29分発行